

# あそ 5

2017



ハなすよこも  
カバも

午の野の虹の中

穂典



# あそ

五月



動

落蟬に動かぬものと動くもの  
藤の花龜が動くまではゐず  
異國語の舌が動いて八重桜  
動物園の柵の内そと夏木影  
あるはずと動物園の蟻の道

東京 佐藤 喜孝

鈴最中

降り出せり花はたたずむ三分咲き  
お土産に小鈴の最中花三分  
茎低き庭のフリージア眩い黄  
到来の金柑二キロお裾分け  
菜種時雨食前食後飲み薬

東京 石森 理和



雑詠

山梨

井上 石動

網つくるふ浦の苦屋や風光る  
見れど飽かぬあをき深淵燕来ぬ  
日は飲んであふれけり仏の座  
みさゝぎを覆へる春の夕焼かな  
春の鹿に見つめられては動かれず

埼玉

大日向幸江

花の下

それぞれに持ち寄る料理花の下  
卒業や記念写真の輪にあの子  
鶯の声に起こされ日曜日  
鶯の 今日全山に囀する  
山水をパイプで引いて芹豊か

千葉

黒澤 佳子

ふらここ

輝やペットボトルの蓋回す  
口元を覆ふマフラー優男  
春の風地下階段を蹤いて来る  
春一番見舞に向かふ夫の後  
ふらここや睡くなつたの婆の hands

東京

七郎衛門吉保

食べる

鯛あら煮春の馳走の響きかな  
ガスコンロ新しくして桜鯛  
露味噌をスーパーで買ふ上野駅  
菜の花のポタージュとありシャンソンと  
声弾み箸つく春菜母娘旅



東京

篠田 純子

初台リハビリテーション病院

ほほほおーんと梅を見上ぐる笠智衆  
春 埃 電 動 車 椅 子 自 在  
二足歩行めざしリハビリ室おぼろ  
楽譜ひらく青年二人春のカフェ  
初 桜 還 付 で 払 ふ 入 院 費

石川

定梶じょう

ゆう笛

まだあつたかい手の卵冬さなか  
雪吊のすつくすつくといいい天気  
電柱の身じろぎしたく氷点下  
寒星並ぶや独房にゐるごとし  
ゆう笛のをはり吹き切り寒波急

四月や

埼玉

須賀 敏子

露味 噂 や 少 し 迷 ひ し 山 の 径  
三・一 一 静 かに デ モ の 人 と なる  
軽 い 靴 選 ん で い ざ や 春 の 野 へ  
緑 啄 あをげ 木 鳥 をら を 追 ふ 夫 の 背 や 光 る 風  
良 き 映 画 終 は り し 午 后 や 春 雲  
『この世界の片隅に』

埼玉

竹内 弘子

目

眼 病 み 女 に 風 邪 ひ き 男 西 鶴 忌  
起 き ぬ け の 窓 を 細 目 に 四 十 雀  
目 が 四 つ 川 中 島 の 飾 り 凧  
満 天 星 の 花 が 目 じ る し 母 の 墓  
春 な れ や 半 透 明 の 潮 汁



東京

田中 藤穂

仏像展

春 雲 仏 像 展 に ゆ く つ も り  
回 顧 録 机 上 一 輪 紅 椿  
「明日良くなる」は私の呪文花粉飛ぶ  
日蓮像 山朱萸の花空に溶け  
税申告了へし五体のゆるみかな

三重

長崎 桂子

うらら

浅 春 や 風 の 機 嫌 は 脅 か す  
春 浅 し 芥 集 積 場 の ネット 巻 く  
水 温 む 箒 の 雑 巾 出 番 かな  
春 一 番 芥 と 帽 子 に 悲 鳴 と ぶ  
日 の 色 に 明 け て 草 木 の う ら ら け し

東京

森 なほ子

初桜

春 愁 や た し か に 伸 び る 爪 と 髪  
結 ば れ し 水 仙 の 葉 に 春 み ぞ れ  
遊 船 の う ね り よ せ くる 桜 かな  
初 桜 傘 か た む け て 見 上 げ け り  
卒 業 の 子 ら コ ン ビ ニ に 屯 せ る

東京

赤座 典子

桜二分

春 時 雨 傘 を 使 は ぬ 小 学 生  
啓 蟄 や 二 人 暮 し の 一 人 旅  
ス ナ ッ ク の 県 政 談 義 春 雲  
杉 の 花 旅 番 組 に 籠 も り き る  
投 菓 の 一 種 減 り け り 桜 二 分



埼玉 秋川 泉

春が来た

雉鳴くや目をこらしても広野原  
露の臺幼子の手に香があふれ  
老い猫の肉球やはし春暖炉  
手土産はをうなの好きな福寿草  
山独活や猫も香りをめでてゐる



## 四月作品より

秋川泉・森なほ子

年賀状逢ふこともなく五十年

秋川 泉

誰もがこんなことがありそうです。無駄な言葉はひとつもなく、共感を呼びます。五十年といえは人生の大部分です。ほのかな思いのあった人かもしねませんが、別々の人生を歩み二度と逢うことはなかったのです。過ぎ去った歳月をしみじみ振り返っている作者です。(なほ子)

をさな子の部屋中ぐるぐる大晦日

石森 理和

大晦日、大人は忙しそうに働いているし、なかいつとも違う雰囲気、幼いながらなんとなく興奮気味に部屋をぐるぐる回っている。そんな姿を優しい目でここにこ見守っている理和さんです。(なほ子)

ドア押して暗きの中よ沈丁花

井上 石動

作者はドアを押して部屋に入られた。花瓶の沈丁花のかおりが暗い部屋いっぱいに広がっていた。と私ははじめ思いました。しかしその反対で、玄関ドアを押して外へ。夜の庭に暗い中一面に広がる沈丁花のかおり。さて、どちらでしょうか。どちらも明と暗。そして沈丁花の濃いかおりが……。思わずうっとり致しました。(泉)

如月のずんと富岳や夜が明ける

井上 石動

石動さんは山梨県にお住まいの方です。厳冬の、それも夜明けの富士を目の当たりにされたのです。なんと羨ましい！その迫力を「ずんと」と表現しました。白い山肌に巒の一本一本が薄明にくつきりと

見えてくるのでしょうか。そんな富士を見てみたいものです。(なほ子)

### 陰となり窓を横切る春の鳥

大日向幸江

部屋の中に居て、ふと窓に目をやると…あら！鳥の陰が…。何鳥かしら？燕が巢をかけようとしているのでしょうか。春は繁殖委の季節、子育ての季節。窓の外では沢山の囀りが聞こえます。作者は春の鳥を楽しめたことでしょうか。(泉)

### 露の薑香に顔そむけマルチーズ

大日向幸江

せっかくの春の香りもワンくんには実は悪臭？無理ありません。嗅覚の優れた犬にとってはショックだったことでしょうか。思わず顔を背けてしまったのですね。情景を想像すると、笑ってしまいます。でも、人間だつてあの香りに春を感じられる人はどれだけいるのでしょうか。若者や子供、露の薑香を食

べなれない人など、けつこうマルチーズ並に顔を背けてしまうのかも。(なほ子)

### 満目の土筆あまたや常磐線

黒澤佳子

作者は常磐線（上野から終点は宮城県岩沼駅までを結び八十駅ある。〃本線〃を名乗らないJR線の中で最も長い路線）から見渡す限りの土筆を観られた。さぞ、いっぱい「春」の息吹を感じられたことでしょうか。(泉)

### 焼き芋の包みの新聞読み耽る

篠田 純子

焼き芋を包むのは古新聞が定番。なぜか真新しい新聞はあまり見ないようです。一体いつ頃の新聞？と思うようなものが生々しさがなくて、焼き芋には似合うような気がします。ふとその見出しに興味をひかれ、つい読み始めてしまう作者。せっかくの熱々

が冷めてしまいますよ。(なほ子)

### かほ上げよ金次郎像鳥雲に

定梶じょう

二宮金次郎像は、薪を背負い本を読んで歩いている。その金次郎に作者は「顔を上げて越冬して北に帰る鳥を見てごらん、下ばかり見ていないで春の空を見てごらん」と語りかけた一句。あたたかな気持ちとユーモアが感じられる作品です。(泉)

### 団子屋の蒸籠の湯気寒気団

定梶じょう

日本をすっぱりおおう寒気団、その中でももうもうと湯気を上げる団子屋の店先、その湯気の中の団子。寒気と湯気の対比、始めと終わりに

置かれた「団」の字、大変技巧的な構成の句と思うのですが、技巧を感じさせず、さらりと自然に読めしてしまうのです。たくまざる技巧というのでしょうか。

か？(なほ子)

### 松過ぎて日記一行のみとなり

須賀 敏子

暮れからお正月にかけては一年で一番大きな節目の時期です、慌ただしく忙しい暮れ、一夜明ければ新年。主婦にとってはまさに一大行事。お正月は里帰りや帰省の子や孫を迎えて賑やかな毎日。それとももんびりとテレビ三昧の寝正月？そんな非日常も松の内まで。過ぎてしまえばまた日常が始まり、日記は一行で足りてしまうのですね……誰も味わう気持ち「日記一行」という言葉で的確にいとめていきます。(なほ子)

### 半醒のまくら許まで木の芽雨

竹内弘子

春の明け方、雨の音が…。木々を芽吹かせるやさしい雨が降り出しました。目覚めかけましたが、もう一度眠りに誘われなんと気持ちのよう雨の音で

しよう。樹木も草も新しい生命をいっぱいにひらく季節がはじまりました。(泉)

初蛙昨日鳴きしが今日鳴かず

田中藤穂

庭先で昨日初めて鳴いた蛙。さて今日はどうしたことかまだ鳴きません。庭に訪れた動く命の春のはじまりを蛙の声に感じ作者はその小さな訪問を楽しまれているのです。(泉)

日は高き風呂を味はふ松の内

長崎 桂子

前句と対照的にこちらはまだ松の内です。お正月は特別なハレの期間、それ故、まだ日の高いうちにゆつくりと風呂に使って、普段はしない贅沢を自分に許す作者です、心地よくしみじみとお正月気分を味わっておられます。「味はふ」の語が効いています。

(なほ子)

柴又や団子艶めく春灯

森なほ子

東京葛鋸柴又帝釈天は、映画『男はつらいよ』の寅さんで有名。そのとらやの団子(高木屋)。春の明るく華やいだ灯に照らされた団子は、艶やかであり美味しそうですね。(泉)



あをキワード俳句辞典(とつとて)

外つ国

外つ国のひとの坐禅やこぼれ萩  
外つ国の人にかこまれ枯葉道  
外つ国の戦禍のニユース花カンナ  
外つ国の人へ手真似の土瓶蒸し  
外つ国のパプリカ求む春淡し  
外つ国の人の饒舌北風に乗る

突如

カフェテラス突如するする蝮草  
竹林を突如賑はず寒雀  
うぐひすの突如の美声地震もなし  
ここですと突如知らせるクロッカス  
桃の花突如の風に舞ひにけり

突然

突然に半袖の街雀の子  
指の先突然に秋深まりて  
突然な暑さ鳩の声まのび  
突然の騒ぎのとは熊ン蜂  
突然の辞意の表明桐一葉  
突然にボス猿叫び冴返る  
凧の突然硝子を鳴らしに来

篠田 純子  
佐藤 恭子  
山莊 慶子  
石森 理和  
須賀 敏子  
赤座 典子  
石森 理和  
早崎 泰江  
早崎 泰江  
早崎 泰江  
井上 石動  
赤座 典子  
石森 理和  
早崎 泰江  
早崎 泰江  
早崎 泰江  
井上 石動  
赤座 典子  
石森 理和  
鎌倉喜久恵  
赤座 典子  
篠田 純子  
東 亜 未

行く春や五十七の訃突然に  
みんなんや夢見心地を突然に  
とつとつ  
とつとつと吾れの心音儼の中  
とて

西湖とて渡月橋とて水温む  
勤めとて松の気分の車中かな  
「羽衣」を観んとて出づる寒の雨  
酔ひ覚めの水の味とて忘れ草  
失語とてスイカ笑顔で食べにけり  
入日とて日の出とてパゴダに來て涼し  
年始め九十五歳の葬りとて  
偏西風蛇行せりとて春寒し  
春の山海を見んとて登りくる  
節目とて過去振り向けり郁子の花  
ねぶたとて絵団扇持ちて跳ね踊る  
蛞蝓とてひとつの命花を食む  
冬支度せんとてつまり老い仕度  
臨終とて弱音は吐かぬ水漬  
侘茶とて木枯といふ菓子添へて  
今だけのやはらかさとて真菰茸  
流星を観んとて一人着ぶくれる

須賀 敏子  
須賀 敏子  
定梶じょう  
堀内 一郎  
山莊 慶子  
鎌倉喜久恵  
河合 笑子  
東 亜 未  
佐藤 喜孝  
堀内 一郎  
赤座 典子  
鎌倉喜久恵  
山莊 慶子  
早崎 泰江  
齊藤 裕子  
鎌倉喜久恵  
篠田 純子  
木村茂登子  
赤座 典子  
森山のりこ

寒梅や刺さるものなり髪のは 佐藤喜孝

とぼとぼと帰りの道に冬薔薇 秋川 泉

日向夏蜜柑金柑虫眼鏡 石森和子

オリオンの揺らめき蒼し風の音 井上石動

山寺に和尚と狸それぞれに 大日向幸江

満目の土筆あまたや常磐線 黒澤佳子

越後路や糝粉塗して山眠る 七郎衛門吉保

リハビリのいっちにいさんし春動く 篠田純子



夜に入ると音にちからの雪解川 定梶じょう

田雲雀や空堀川に春の水 須賀敏子

半醒のまくら許まで木の芽雨 竹内弘子

ぜんまいを柔らかく煮て舅の忌 田中藤穂

生きること禅と説く僧寒の内 長崎桂子

寒明くる少し濡れゐて朝の道 森なほ子

野遊や初めての靴すぐに脱げ 赤座典子

喜孝抄



## 比来披見

|                  |        |
|------------------|--------|
| ホトトギス 四月号        | 稲畑 汀子  |
| もう一ついかか三つ目桜餅     | 稲畑 廣太郎 |
| 独り言呟く少女亀鳴けり      |        |
| 沖 四月号            |        |
| けふ雨水気つきてよりの二度寝かな | 能村 研三  |
| 雨月 四月号           |        |
| セーターとふ人の心を包むもの   | 大橋 暁   |
| 槐 四月号            |        |
| 美しき水の城は入れない      | 高橋 将夫  |
| 馬酔木 四月号          |        |
| この荷物どう始末せむ竈猫     | 徳田千鶴子  |
| 風土 四月号           |        |
| 実朝の濤に擲つ落椿        | 南 うみを  |
| 京鹿子 四月号          |        |
| 口笛はうぐひす餅の時のこゑ    | 鈴鹿 呂仁  |
| 六花 四月号           |        |
| 薄氷を指で穴開けたるをみな    | 山田 六甲  |
| 万象 四月号           |        |
| 七転び八起きとなりぬお正月    | 大坪 景章  |
| 日本橋角の海苔屋のチューリップ  | 内海 良太  |
| 春燈 四月号           |        |
| 老々のこころ弾みや日脚伸ぶ    | 安立 公彦  |
| 鴨 四月号            |        |
| 人待たず臘梅に顔うつめめて    | 高橋 道子  |
| 末黒野 四月号          |        |



喜孝抄

|                  |       |
|------------------|-------|
| 縁側にいまも妻の座寒日和     | 小川 玉泉 |
| 寒林の吐く闇の濃し杣の道     | 松本三千夫 |
| 雲の峰 四月号          |       |
| 子ら寄りてやや春めきぬ三回忌   | 朝妻 力  |
| 萱 四月号            |       |
| アネモネやいつもゆめみのお下げ髪 | 木村 嘉男 |
| 落椿踏みたる足の力抜く      | 亀田虎童子 |
| 春寒し銀糸のまじる豊縁      | 小島 良子 |
| こだま 三月号          |       |
| 何れはと思ひしままに春埃     | 松林 尚志 |
| 蝮の道              | 高橋 将夫 |
| 永遠の命おそろし春の宵      |       |
| 花を待ち潮時を待ち迎へ待つ    |       |
| 春野から歸りたがらぬ孫とをる   |       |
| 母のゐる場所は風鈴よく鳴りぬ   |       |
| 金魚から見れば人間つまらなし   |       |
| 妄想は入道雲を凌ぐなり      |       |
| よろづ屋にちちろ酒屋にきりぎりす |       |
| 春惜しむ母校の門を出るごとく   |       |
| 香水を嫌がつてゐる仁王かな    |       |
| 竜宮も月の都も古りにけり     |       |
| 故障したやうにきちぎちばつた飛ぶ |       |
| マドンナは今もマドンナ敬老日   |       |
| 水音は流れ去らずや秋の川     |       |
| 吐息では紙風船のふくらまず    |       |



須賀敏子

重たさに耐えてそれから落椿  
 筑波山蝦蟇の膏や梅咲けり  
 四つ辻の地藏菩薩や春うらら  
 花椿和服姿のモデルかな  
 文旦や未だ土佐には行けぬまま

重たさに耐えてそれから落椿

面白い。俳句は一点を切りとって述べる文芸である、  
 とは昔から言われますが、この句のように時間の経過を  
 とり込んでもいい句が作れるわけです。

筑波山蝦蟇の膏や梅咲けり

「蝦蟇の膏葉は神社の近辺に今でも売られているので  
 しょうね。でも、だからこそ一つ外した方が面白くなる  
 と思う。」筑波山四六の蝦蟇や梅咲けり」

花椿和服姿のモデルかな

敏子さんの仰りたいのはモデルではない、和服姿で  
 ある筈。「花椿モデルの和服姿かな」。

文旦や未だ土佐には行けぬまま

中七以下に説明臭。「文旦や土佐に行かなと思えども」。  
 桜の季の到来を「毎年のことながらどうしてこう嬉しい  
 のか」とハガキにありました。全く同感。年齢の所為も  
 あるかも。

山荘慶子

病室にニコライの鐘春の暮  
 隣人の大き嚏や春の夕  
 街中の潤みてをりし春の宵  
 もの芽やいつもの日暮やつて来し  
 花桃や芽吹きしまゝの二三本

### 隣人の大き噺や春の夕

坐五「春の夕」と置くのも悪くありませんが、現代俳句風に作った方が、「隣人の大き噺や暮れかねて」。

### 街中の潤みてをりし春の宵

「霞」から「朧」へ移行する時間の湿潤。

### ものの芽やいつもの日暮やって来し

巧い句。上五と中七以下が何の係りもない筈なのに上手に坐っています。「芽吹き」に對置するに「いつもの日暮」。巧い。

### 花桃や芽吹きしまゝの二三本

咲いている中に芽吹いたままの桃の木がある、そういうことなんでしょうか。しかし、花と芽吹きと、双方を言おうとするのは句を弱くします。「桃の木の永き芽吹き」の二三本。

大日向幸江

誕生日猫と語りて春炬燵  
飛砂の海を渡るや冬の果  
流したる雛の見上げる空青し  
夜桜の下に恩師を囲みたり  
鶯の上手に鳴くや山緑

### 誕生日猫と語りて春炬燵

句や歌で助詞「て」を多用することを忌む傾向があった、相当名の売れた俳人が十数句発表して殆んどに「て」を遣ったことがあり、響盛を買った、ということが過去にありました。直せなければともかく、そうでなかったら「て」を外す努力をすべき。「誕生日猫と語らひ春炬燵」。「て」の音が強く響くからでしょう。

### 飛砂の海を渡るや冬の果

上五は「とびすな」と読むんでしょうか。しかし「とびすな」の措辞は落ちつかない。季重なりを承知で、「黄砂とび冬の果なる海渡る」。霾風は冬期末から始まるそうです。

### 流したる雛の見上げる空青し

おおよそ「見上げる空が青い」という言い方は凡。「流したる雛に空の深きこと」。

### 夜桜の下に恩師を囲みたり

度々言います、散文の語序。「夜桜の下に囲むや恩師たり」。「恩師」を強調したい。

### 鶯の上手に鳴くや山緑

「鳴くや」と「やま」の音が重なって面白くない。「鶯の上手に鳴いて山緑」。

長崎桂子

春の雪愚痴に溜息不安かな  
春雪を搔く日は続く瓦落つ  
寒もどる風は香りを届け過ぐ  
桃と梅精出す手入れ老夫婦  
三月や行事行事に風つよし

### 春の雪愚痴に溜息不安かな

「かな」は大変重要な切字とされて、昔は殆んど季のことばに付いたそうです。現代そんなことはなくなりましたが、それでも重要な切字であることには変わりはない。ですから「不安」の語に「かな」をくつつけること上手な遣い方とは言えない、と思うのです。「春の雪不安溜息そして愚痴」。「春の雪」が坐っています。

### 春雪を搔く日は続く瓦落つ

説明しようとするために動詞を遣いたくなるわけで、「瓦落つ」は説明。ものだけを据えて説明しないのが俳句の常道。読み手に鑑賞を任せるわけです。「春雪を搔く日は続き軒瓦」。

### 寒もどる風は香りを届け過ぐ

具体的に香りの中味を言ったほうが宜しいわけですけど、そうでないなら「寒戻り何の香りの風が過ぐ」。

### 桃と梅精出す手入れ老夫婦

「精出す」はいわば成語。俳句に生かすには難しいこ

とば。「桃と梅剪定夫婦老ゆるとも」。

### 三月や行事事に風つよし

「行事事」のくり返しが生きていない、と思う。「三月は行事事あまたに風つよし」。

田中藤穂

蕨煮て安房の泊りも二日目に  
菜の花やこんなところに皇子の墓  
春陽差す光悦垣に竹の影

### 菜の花やこんなところに皇子の墓

「や・かな・けり」を古い、と言って嫌う俳人が相当数います。確かに遣い方によつて古くなることはあります。しかし、石田波郷は「何でもいから、や・かな・けりを遣え」といいました。私もそちらの方なのですが、藤穂さんの掲句、「菜が咲いてこんなところに皇子の墓」としてもいいわけで、どちらを可とするか、藤穂さんはどうでしょう。

### 古民家の重き引き戸や花の冷え

佳句。百年以上たたないものは古民家とは言わないそうですから、「重き引き戸」、さもありません、と。

### 室あらば閉込めたきは春愁

「室」は「むろ」なんでしょう。古代の竪穴住居も「室」の一つなんだそうですが、要するに「住み籠もる所」「物を入れて外気に触れないようにした所」等の意味があるようで、そんな処があったら「春愁」を閉込めておきたい、と。佳句。

秋川 泉

春の陽や猫の肉球むにゅむにゅと  
涅槃図や嘆きの象は鼻を上げ  
囀りの空また見上げ帰り道  
陸前の津波禍の町春の月

### 春の陽や猫の肉球むにゅむにゅと

変ったところを見て詠んでいる。あの肉球を形容する

### 春陽差す光悦垣に竹の影

「竹の影」がよく効いててしかも竹垣に竹の影が差す、といういささか贅沢な景。春の日ざしが優しいのです。以前のおハガキで藤穂さんが「芦田高子」の弟子であったことを書きなっていました。その歌集『内灘』は読んだことありまして、とともに万葉植物の研究者でもあったことを今思い出しております。確か歌碑が、百万石前田利家が祭神の「尾山神社」にある筈。

赤座典子

春昼や車内の会話たわいなく  
雪解田に啄む鳥の此処彼処  
古民家の重き引き戸や花の冷え  
室あらば閉込めたきは春愁

### 雪解田に啄む鳥の此処彼処

この句も散文の語順。そして上五の「雪解田に」。大概「こんな」は切字「や」に置き換えることができる筈。「雪解田や鳥が啄む此処彼処」。

に「むにゅむにゅ」とは。感じたところを正直に表現したのです。

### 梅見して袂に残るそのかほり

冒頭に「梅見」と言ってしまったため、袂に残るかおり、が平凡になってしまった。「そのかほり袂に残る梅見して」。

### 涅槃図や嘆きの象は鼻を上げ

なるほど、図中の象は鼻を上げて。

### 囀りの空また見上げ帰り道

「帰り道」を結句に据えることが平凡に近づきます。また「見上ぐ」よりも「仰ぐ」の方がことばがおとなしやかになるのでは。「帰り道囀りの空また仰ぐ」。

石森理和

無人駅 駅舎に被る大桜  
ランドセルなげて足湯を終業式  
卒園のその子に大ききランドセル  
つんつんとしなつくらずに桃の花

## 無人駅駅舎に被る大桜

ちつぽけな駅舎に大きな桜の樹。今まさに満開。あるいは「大桜」、もしかしたらそういう種類の桜？「無人駅駅舎が被る大桜」。

## ランドセルなげて足湯を終業式

「足湯を」は、「足湯を」しましたよ」のことは省略して余韻を遺す方法、と学校では教えました。確かに、「なげて足湯や」と置けば湯の中へランドセルをなげこんだようにもとられかねない。実はこんな「を」の遣い方は随分古くて、和歌に多いわけですが、承知で「足湯を」としたわけですから可としなければならぬ。

## 卒園のその子に大きランドセル

卒園と入学を詠んだわけですけど、やっぱりどちらかにしたい。「入学の大きな大きなランドセル」。

## つんつんとしなつくらずに桃の花

「しなつくる」は、体裁ぶる、等の意味なんでしょうね。それをつくらぬわけですから、「つんつん」の語

も出てきた。でもです、「しなつくらずに」の「に」が衍字に近い。この「に」を外したほうが宜しいと。「つんつんとしなをつくらずに桃の花」。

## 七郎衛門吉保

防潮堤ばかり六年春愁ふ

被災地の若き語り部春帽子

上皇と後鳥羽以来の遠霞

## 防潮堤ばかり六年春愁ふ

「六年」。この語の置き方が俳句的とは言いがたい。もっと具体的に言う方がいいし、そうでないなら、「六年」をとってしまった方がいいと思う。「防潮堤ばかりの春を愁へけり」。

因みに、「春愁」を「春愁ふ」とするのは誤りである、と仰有った著名な俳人がいらつして、それはラジオだったと思うのですが、「今は詳しいことを言う時間がないのですが」との言説付きでした。要するに「春愁」の「愁」は、漢文では自動詞でしか遣わぬ。「春(を)愁ふ」と遣ってはいけない、ということなのです。「春愁ひ」

## 料峭や浸り温めるビバルデイ

ビバルデイといえば「四季」しか知らないのですが、相当数の曲を作っているようです。「浸り温める」の措辞がありますので吉保さんも「四季」を念頭に置いている掲句、と思われる。しかしながら本動詞と補助動詞の関係ならともかく、「浸り温める」は二つの対等の動詞を並べたわけで、句力を弱めてしまうと思う。意味が弱くなるけど、「料峭や温めてゐたるビバルデイ」のように「浸る」を外してしまうのも一方法。

## 上皇と後鳥羽以来の遠霞

面白い。取合わせもこの位飛躍したい。どんな傾向の結社誌でも受け入れられる句です。後白河院と後鳥羽天皇。季語「遠霞」で結びつけて。

## 佐藤喜孝

うすき日をあつめて十月桜かな

出た息をまた吸つてゐるマスクかな

## 被災地の若き語り部春帽子

中七で休止部分があるのですが、これは「語り部の春帽子」と続くはずのもの。「被災地や」「被災の地」と置いて切れを入れたい。「被災の地若き語り部春帽子」。

### 出た息をまた吸うてゐるマスクかな

で、思い出したことがあります。風邪引きの時もマスクをしない友人がいて、聞いたたら「出た息をまた吸うてゐる」状態を嫌ったから、だったのです。この方は句歌に係りを持たぬ人でしたけど、俳人の喜孝さんは即座に句にした。

### 分度器が海の日に出に一年生

思い起こしてください、水平線を昇りかけた太陽。そうなんです、その時の半円の日輪に度数を書き込んだら即ち分度器。しかも掲句の優れている処は「分度器を」ではない、「分度器が」なのです。主語の「二年生」を座ったものにするには「分度器が」でなければなりません。日の出を分度器に見立てたものではなく、入学の子が分度器から日の出を連想見ました。一年生は分度器をあつかわない、などと言うなかれ。着想、比喩の卓拔さ。すみずみ迄神経のゆき届いた一句。



中川句寿夫御夫妻

### 句寿夫さん

定梶じょう

2017年6月号

# 俳句界

毎月15日発売  
定価100円(税別)

空見上げていますか？

俳句で詠みたい鳥

夏は代筆する鳥を中心に、春・秋・冬を代筆する鳥を合わせた約400種類をカラー写真で掲載！ 解説、鳴き声、飼育方法、鳥の区分け方、小杉博一著、〇論考 坂口眞弘

タビタビ俳句界NOW 復本一郎

高野ムツオ

俳句という血縁―尺取、神代、俳人

佐藤真正共「秋」 佐藤真正、佐藤真正、佐藤真正

今日「下」 下野雅夫 金澤博行、野田浩一、金澤博行、野田浩一、金澤博行

大正十五年生れの句寿夫さん、満年齢九〇で逝かれたわけ。現在の社会環境ではびっくりするような高齢とはいえませんが、ともかく脳年齢は亡くなる際まで実にしつかりしていたのでした。枕もとに、身うちへの謝意のことばを遺して。

分校の生徒いま着く運動会 句寿夫

いつ頃の作か、御本人もはつきりし得ない句。昭和二〇年の敗戦で除隊、復員した句寿夫さんが、近隣に住む先輩の懇意で句作りの世界に入るわけですが、初めからしつかりした句を作っていたのでした。

やっぱり俳句に携わっていて句寿夫さんと同齡の私の長兄が、『いま着く』の措辞が何ともいとおしいと評したのを思いだすのです。

やがて句寿夫さんは、弟子徒弟を大勢つれ抱える棟梁の中川家へ婿入りします。奥さまの安子さんは近隣でも端麗なことで知られていた方でしたが、先立つこと十年少し前。その血は、中川家の長女久美子さんが色濃くうけついでいるのです。

昭和三〇年代までのその俳歴は、『くらげ』という俳誌に所属していた、ということしか私は知らない。資料を残していないし話も聞いていない。当時の俳名は『久寿夫』でしたが、『くらげ』をやめたあとは地元紙の新聞投句で名をなすことになります。

新涼やネクタイしめて人に会ふ

檜炭の俵の蓋は檜の枝

鳥渡る村を輪島のお膳売り

炭がまに忌明けの塩を振って入る

風土色の強い句群ですが、当時流行の『風土俳句』のつての作ではない。住まっている近辺を詠めばいいやでもこうなる、ということ。

地元の『ホトトギス』系の句会では殆んど理會されない数年が続き、やがて『風』誌に入会。名も『句寿夫』に変えて少し元氣が出てきた頃です。でも、その『風』誌に載った句群の資料が一切ありません。その頃の新聞投句を参考に何句かを。

秋燕動かぬ山底縦横に

新涼の群を離れて眞鯉かな

雪解川自足の母に音立てて

『雲母』終刊の何年か前でした。私の経営する企業が傾いてきて俳句に割く時間がなくなってきました。私に同情して句寿夫さんも『雲母』を退会。数年の刻を経て、地元での超派閥的句会の仲間の誘いで『寒雷』系の『麓』誌に入会、すぐに同人に迎えられます。当時は私大阪に住まってまして、それでも始終連絡はとりあっていました。『寒雷』系統の句柄を好まないことが、と。

九年間の在阪生活から私が帰郷した時、細川加賀（晩年を石川県小松市で過ごしていました）の最後の句集『玉虫抄』を持参して句寿夫さんに見せたのです。

蛇苺すこし歩いて蛇苺 細川加賀

長崎はちんちん電車花曇

朝市に売る楽しみの大根洗ふ  
ぜんざいも出て分校の雪下ろし  
初霞牛買ひが来て納屋覗く  
春昼を尋ねし留守の時計鳴る  
竹藪に日輪淡し穴まどひ  
雪の戸を余さず廻る刃物売り

特に『春昼を』は、私が俳句を再開して間なしに句会で出あった作品。驚いた記憶があるので。  
やがて『風』をやめた句寿夫さん、『雲母』に入会、『雲母富山句会』に所属することになります。とどくに、啞然とするほど、いわゆる『雲母俳句』に同化してゆくのです。

鶯が鳴く縹渺として数へ年  
朴の芽がほぐるる童話読むやうに  
ただよへるもの白壁の今年竹  
父看とる更に遠くの夕蛙  
竹林に入りて万の目しじみ蝶

窓といふ窓に雪降り版画展  
いちはずや夢二のをんな眠たさう  
天ぶらを食べそれからの日永かな

その主宰した『初蝶』は当時、小笠原和男さんが継承してましたが、句寿夫さんは即座に『麓』をやめて『初蝶』に入会。それが平成十七年だったか十八年だったか。この文章を書くために当主の節志さん御夫妻の手を煩わして資料を探して貰ったのですが、『初蝶』は残っていたけれど『麓』誌がもの見事に一冊も遺してないのです。

句寿夫さんの遺した短冊より何句かを。

群がって一本づつの曼珠沙華  
甚平や死に損なうてをると言ふ  
朝刊が来てそれからの雪の嵩  
鶯餅つかみどころのありにけり  
河骨の花見るただそれだけの用  
炎天を来て先づ尿を採られけり

出穂はや倒伏ところどころかな  
鱚雲能登も広しと思ひけり

『雲母』を私とともにやめて、何年間か『俳句懇話会』なる超結社の会に入りましたが、その時の句群。

寒鯉のゆらりと水に戻さるる  
身を細う細うして秋の蛇なりき  
盆過ぎて親しくなりぬ杉木立  
おっとりとしておて水は盗むもの  
梅雨の妻意外なことを聞いてくる  
時の日のあるだけの鎌出して研ぐ  
地下足袋の鞆きっちり花石榴  
冬耕の明るき方へ方へ雲  
初蝶や葉で顔のほてる日の  
屋根替へを今年本気で考へる  
雪搔いてをり相撲見る時間まで  
木を伐って瀧を裸にしてありぬ  
海老根群生告げやうか告げまいか

あはただしく

佐藤喜孝

中川句寿夫さんは『あを』を駆け足で過ぎていった。昨年の四月号から今年二月号までに発表された句は「はしたて集」を含めて八十九句。私は強烈な印象を抱いた作品であった。

定樞じょうすけさんの仲立ちで句寿夫さんの遺句集「このもん」を作らせて頂いた。何かの縁であらうか、手元に一枚残った投句箋に「こ・の・も・ん」と平仮名が全て使はれてゐた。早速句集の題字に使った。句寿夫さんの句を読んでみると季語の扱ひに舌を巻く。

猫の子のぞろぞろ國勢調査かな  
言葉尻ひろはれて居る春の風邪  
電気屋が来て春昼の仏の間  
啓蟄やそこを動かぬ台秤  
烏の巣賣薬さんが通りけり

色足袋や生涯妻のここなもん

『色足袋』の句を、あなたの代表句だ、と言いましたら、当時病んでいた奥さまのことを思われたのでしよう。複雑な表情をなさったのでした。

葬儀には喜孝代表より弔句弔電を頂きました。『あを』誌との縁は一年足らずでしたけれど遺族になりかわりまして厚く御礼申し上げます。晩年、と言ったら語弊がありますが、以後の句々についてはまたそのうち『あを』誌に書くこともあるうか、と。



名人芸である。一朝一夕で至る境地ではない。じょうさんの追悼文を読んで然もありなんと思った。また、自己を詠んだと思はれる句にもその名人芸が遺憾なく発揮する。

実の榎植目鼻画けば卒寿かな  
敬老日父を訪ねて用問はる  
神の留守爪を切るため指ぬくめ  
病院へ逃げ込む心算十二月  
何も悔やまぬ今日の冬帽子

無闇に文学臭のある句など皆無である。きっと全身が俳句で出来てゐるのであらう。

句寿夫さん、読み飽きない句をありがとう。

このもん  
中川句寿夫

雑詠以外の句  
 輪飾や煤け柱の古釘に 冬は  
 双六の新名勝をめぐりけり 昭五  
 鯉跳ねて躍れる籠や汚る 昭五  
 雨折々雛の障子をぬらしけり 昭五  
 草餅や卓にうつれる色時計 昭五  
 シンボン玉大きく吹いて見せけり  
 花飽きまこに水邊の櫛を得し

木の實際降り提灯あけて立ちまゐる  
 以落ちてゐる椿にも置く園かな  
 水浅や病みあがりなるもの忘れ  
 病人に一家残らず花廢れ  
 句稿は「死を待つばかりす朴魯植」  
 と書き添ふなり  
 朝鮮の俳諧伴や朴魯植 虚子

本流は流かりたふ抄  
 そぞくさと世買ひ初湯をすまけり 昭五  
 表ひせばとみた身軽や実稽古  
 城内もこら町めぐるとかかな  
 雪空や鮮人にして喪章賣く 昭五  
 今出でし雪の度船を待ちけり  
 大寒や靴き白める木の間道  
 浮かれ猫月のデッキをさまよへり  
 露瀉深き天邊の芝焼きけり

花桐や崩れて久しき廟の垣  
 田移や諸手にまげて人承りけり 昭五  
 杖風や吹かれて白き草の花  
 鶺鴒の籠鳴くなる冬木かな 昭五  
 待宵や船より告ぐる鳥便り 昭五  
 ひさびさの屋夜となりし蛙かな 昭五  
 ふるさとの又管近き句座にあり  
 温定に木句籠ともいひつべし

一本は庭にさし込む稲架支へ  
 奥能登の苗代荒れの続きけり  
 酒提げて来て屋根替を手伝へり  
 人先に耕し終へる習ひにて  
 売葉の一夜の宿やとろろ汁  
 新藁の穂もて作りし筥かな  
 鳥渡る村を輪島のお膳売り  
 添木せし大自然薯を贈りけり  
 梯子かけてゆがむ庇や黍を干す  
 かさね着をして出てゆきぬ田植荒れ  
 出来秋の米で買ひたる内証もの  
 灰より諸抜き出してくれにけり  
 漆搔く六尺程の竹梯子  
 朝市に売る樂しみの大根洗ふ  
 藁仕事持ち寄る浦は荒れ続き  
 かいば桶浸してありぬ紅葉川  
 ぜんざいも出て分校の雪下し  
 雪の戸を余さず廻る刃物売り  
 檜炭の俵の蓋は檜の枝

一竿に満たず大根干してあり  
 群がつて一本づつの曼珠沙華  
 声がしたやうで筥置いてあり  
 青芝に濃淡のあり起伏あり  
 代筆の礼と思しき茄子トマト  
 白玉を貝の器に辻地蔵  
 鰯雲能登も広しと思ひけり  
 小鳥来る母に手頃な箕が一つ  
 箒草干して束ねるだけのこと  
 傍目にはどれも見劣りせぬ青田  
 磊落でまだ刈る稲を持つてをり  
 雪を掻いてをり相撲見る時間まで  
 父看取る更に遠くの夕蛙  
 豌豆の花に風ある月夜かな  
 雪解川自足の母に音立てて  
 井戸替の井戸の深さが自慢かな  
 泥鰌掘りをれば尼さま通りけり  
 寒卵貫ひし礼を通夜で言ふ  
 田仕舞の煙の中より速夜僧

あとがき

佐藤恭子さんが十月末すい臓癌と診断されました。その日から句を作らなくなりました。いや作れなくなっただのかも知れません。二ヶ月程ではと先生の診察でした。恭子さんは先生の指示を忠実に守り、なんと通ってゐた病院の近くにある観泉寺の紅白の枝垂れ梅の下に立ち、また大木の山桜の花びらを浴びることが出来ました。通院で頑張ってきましたが食欲が一段と失せ、四月二十五日入院、一時は持ち直しましたが五月二日未明静かに息をひきとりました。勝手ながら五月五日堀之内斎場にて子と孫にて送らせていただきました。『あを』ではわたしの気働きの無さをカバーしてくれ、楽しく俳誌を続けてこられました。恭子さんへの感謝もさりながら、恭子への会員皆様のご厚情に改めて御礼申し上げます。

今号は中川句寿夫さんの追悼号といたしました。もう少し前からおつき合いが……、と無い物ねだりの想ひが増します。湿っぽい話はこの位に、いつも食卓に置いてある笑顔でこのあとがきはおしまひ。  
(喜孝)



二〇一七年五月号

発行日 五月十四日  
発行所 東京都中野区中央2-50-3  
電話 090-9828-4244  
ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130655526(あを発行所)  
乱丁・落丁お取替えます。